



「鉄路の闘い」

DVD 発売中
JVD-3014・モノクロ・トーキー・90分
価格：¥5,040(税込)
発売元：ジュネス企画

今回は、第二次世界大戦終了直後の一九四五年にフランスで撮られ、第一回カンヌ映画祭で審査員賞と監督賞を受賞した「鉄路の闘い」を紹介する。この映画は、フランス国鉄がナチス占領中に行ったレジスタンスを描いたもので、監督は、後に「禁じられた遊び」や「太陽がいつぱい」等日本人の映画ファンに人気の高いフランス映画を数多く撮った名匠ルネ・クレマンの長編劇映画第一作である。ルネ・クレマンは、当初ドキュメンタリー映画を作っていたようであり、劇映画第一作目の本作品には、その影響が大変濃厚に現れている。この映画では人間の内面や感情の動きを強調するのではなく、カメラが実際に起きた事実を捉えていくというドキュメンタリー映画の手法がとられており、それが現実に行われた鉄道労働者によるレジスタンスという題材を描くのに適しているため、大きな効果を挙げている。当時全盛期のイタリアンネオリアリズムが、しっかりとした脚本をもとにドキュメンタリーとは異なるリアリズムを打ち出しているのに対し、この映画のリアリズムは、ドキュメンタリーの手法とディテールにこ

鉄道と映画 — 29

第2次大戦、独軍占領下における
フランス鉄道員のレジスタンス活動を描く。

Bataille de Rail

「鉄路の闘い」

題名からお分かりのとおり、輸送司令室、操車場、駅舎、軌道、機関車等ほぼすべてのシーンがこれら鉄道施設の中で撮られている。もちろん一九四〇年代の貨物鉄道であるため、すべて蒸気機関車に牽引される鉄道であるから、それ自体で若干古い感があるし、さらに対ナチスのフランスにおけるレジスタンスの輝かしい活動といってもピンと感じなくなってしまう現代では、この映画を今観ても第二次大戦直後のような高揚感が得られないのは致し方ない。しかし、ドイツ占領下における「フランス国鉄かく戦えり」をテーマにしたセミ・ドキュメンタリー映画としてみると画面が緻密なだけに興味深いし、色々なシーンに若きルネ・クレマンの才気を感じさせる。機会があればご覧になることをお勧めする。

ストーリーは、一九四四年のフランスのある地域の鉄道機関区を舞台に、その輸送司令室を中心に、前半はサボタージュ、破壊工作等のレジスタンスを紹介。後半は、ノルマンディーに向かうナチスの戦車部隊を積んだ貨物列車の輸送阻止の過程を撮っている。先ず巧妙な鉄道輸送妨害の手法が観ていて面白いし、後半の輸送阻止活動は、ほとんどセットを使わない実写のためであろうか、迫力に富んでいる。特に、機関車が脱線し、転覆するシーンは、フランス国鉄が全面的に協力したため、本当に脱線させたのではないかと感じさせるくらいリアルに撮れている。また出演者は、女人俳優を一切使わず、実際にレジスタンスに加わった人が演じているようであるが、映画自体がドキュメンタリーの手法で作られているため、素人臭さを全く感じさせない。



文・羽生次郎

text by Jiro HANYU

1946年東京生まれ、69年東大経済学、同年運輸省入省、人事課長、運輸審議官等を経て、2002年8月国土交通審議官を退官。現在は財団法人運輸政策研究機構・会長を務める。フィルム・コミッション (FC) への取り組みなど、映画へ深い情熱を注ぐ。

だわったリアリズムである。さらに、ラストを含め、全体的に肯定的なトーンが感じられるためかもしれないが、社会主義リアリズムの影響もあつたのではないかと思われる。従って、同時期に公開された戦争の残酷さ、非人間性が強調されたネオリアリズムの傑作、ロベルト・ロッセリーニ監督の「無防備都市」や「戦火のかなた」に比べると感動がやや弱い面があることは否定できない。しかし、名監督の処女作がいつもそうであるように、いたるところにピカリと光るものがある。例えば、サボタージュがナチスに発覚、鉄道労働者が射殺される場面。淡々と撮られているが、銃殺の順番が近づいてくる若い犠牲者の手を年長者が握るカットには、戦争の残酷さとレジスタンスの連帯感がよく現されている。